

## 第 3 章 研 修・広 報 等

## 1. 職員研修

### (1) 職場研修

ア 所外講師（客員研究員を含む）による講演  
 コロナウイルス感染症の感染拡大及び感染予防のため開催なし

イ 所内講師による講演

開催年月日	研修テーマ	講師等
令和2年10月14日 (メールにより実施)	・公務員倫理研修(公務員倫理・ハラスメント防止) ・公文書の適正な作成及び保存に係る職場研修	企画総務部 部長 及川 栄一
書面開催	研究に係る倫理研修 ー研究費の不正使用、研究活動における不正行為の防止についてー	企画総務部企画情報グループ 主 幹 藤本 啓
書面開催	バイオセーフティ研修会 「バイオセーフティ講習」	感染症部ウイルスグループ 主 幹 三好 正浩

### (2) 研究職員国内研修事業

研究開発能力育成事業 [研究能力高度化・産学官連携ネットワーク構築部門]

研修期間	研 修 名 【派遣先】	派遣職員
令和2年10月6日 ～ 10月9日 (4日間)	令和2年度貝毒分析研修会【国立研究開発法人水産研究・教育機構 水産技術研究所】	食品科学部食品保健グループ 研究職員 上田 友紀子
<b>【概要】</b> ホタテ貝などの二枚貝類は有害なプランクトンを摂取し、それを人が喫食すると貝中毒を発症する恐れがある。当所でも流通品の行政検査、生産海域のモニタリング検査を行い、安全性を確保している。そのため、本研修では、最新の貝毒の知見や分析機器による貝毒分析法技術を習得する目的で参加した。 <b>【成果】</b> 貝毒についての基礎知識から最新の情報を得ることができた。また、最新の分析技術である、麻痺性貝毒のLC-MS/MS分析についても技術を習得できた。本研修で習得したことは、北海道の今後の貝毒行政検査においても高度かつ正確に遂行するために活用できると考えられる。さらに、得られた最新の情報は、近い将来導入が期待される麻痺性貝毒の機器分析に関する研究にも大いに役立つと考えられる。		

## 2. 研修生受入

### (1) 大学・企業・団体等

年月日	研修課題名	受講者	人数	担当部等
2. 5. 15	病原体の包装・運搬に関する包装責任者の認証取得のための研修	北部方面総監部、 自衛隊札幌病院	5	感染症部
2. 10. 29	社会医学実習 ー北海道立衛生研究所における公衆衛生業務ー	国立大学法人 北海道大学医学部 4年生	5	生活科学部 食品科学部 感染症部

## (2) 保健所等

コロナウイルス感染症の感染拡大及び感染予防のため開催なし

## 3. 視察及び見学（講義のみ）※

年月日	所属・団体名等	人数	担当部等
2. 7. 16	国立大学法人 北海道大学獣医学部4年生	40	感染症部
2. 11. 20	国立大学法人 北海道大学薬学部2年生	80	企画総務部（企画情報G）、生活科学部、食品科学部、感染症部

(※) 新型コロナウイルス感染症の感染拡大及び感染予防のため、施設の視察及び見学は実施せず、講義のみとした。

## 4. 広報活動等

当所の研究成果や公衆衛生に関する情報などを、道民に紹介するため、次の事業に参加、開催した。  
また、ホームページにて各種情報の発信を行った。

### (1) 北海道立衛生研究所パネル展

- ・日 時 令和2年10月22日、23日
- ・場 所 北海道庁道政広報コーナー（特設展示場）
- ・一般参加者 110名（令和2年10月22日、23日）
- ・内 容 パネル展示（公衆衛生に関する啓発及び業務紹介）

### (2) ホームページの発信

発信内容等の詳細については、各グループ「業務」に記載

- ・北海道感染症情報 (企画総務部企画情報G)
- ・花粉飛散情報調査 (生活科学部薬品安全G)
- ・北海道（札幌市）における放射能濃度の測定結果 (生活科学部生活衛生G、企画総務部企画情報G)
- ・刊行物、研究評価等、その他の情報 (関係各G)

## 5. 研究成果

令和2年度に実施した研究課題等の成果は、北海道立衛生研究所報第71集（2021）のほか、学術誌等に掲載し公表している。

### (1) 北海道立衛生研究所報第71集による公表

調査報告2編、ノート10編、資料3編を掲載したほか、学術誌等で公表した発表論文等の標題や概要、学術誌名等を掲載した。（<http://www.iph.pref.hokkaido.jp/>）

### (2) 学術誌等による公表

発表論文17編、著書等1編、報告書等9編、学会発表20編

## 6. 所内発表会（令和2年度 北海道立衛生研究所調査研究発表会）

誌上開催

1. 【一般試験研究】食中毒の原因となる有毒植物の化学的鑑別法について—誤食患者吐物からの有毒植物の毒成分分析法の検討—  
○高橋正幸、柿本洋一郎、平島洸基、武内伸治（薬品安全G）、平間祐志（食品安全G）、藤本 啓（企画情報G）
2. 【一般試験研究】北海道内に湧出する低張性泉のよう化物イオン濃度  
○高野敬志、横山裕之、青柳直樹（生活衛生G）
3. 【外部資金活用研究】平成30～令和2年度科学研究費補助金（基盤研究C）  
毛糸を用いた室内・作業環境中PCBの迅速採取分析法の開発とリスク評価に関する研究  
○武内伸治（薬品安全G）、姉崎克典（北海道立総合研究機構）
4. 【外部資金活用研究】厚生労働行政推進調査事業費補助金  
室内空気環境汚染化学物質の標準試験法の策定およびリスク低減化に関する研究—加熱脱着法による室内空気中フタル酸エステル類分析法の検討—  
○千葉真弘、大泉詩織（生活衛生G）
5. 【一般試験研究】食品中の甘味料及び保存料の多成分一斉分析法に関する研究  
○岡部 亮、平間祐志、竹脇優太郎、宮島祥太、青柳光敏（食品安全G）
6. 【一般試験研究】記憶喪失性貝毒ドウモイ酸試験法の開発に関する研究  
○橋本 諭、細川 葵、上野健一（食品保健G）
7. 【外部資金活用研究】令和2年度厚生労働科学研究費補助金  
植物性自然毒による食中毒対策の基盤整備のための研究—LAMP法を用いた有毒植物検出法の開発—  
○菅野陽平、青塚圭二、鈴木智宏（食品安全G）、坂田こずえ、近藤一成（国立医薬品食品衛生研究所）
8. 【受託試験研究】厚生労働省  
食品に残留する農薬等の成分である物質の試験法開発—LC-MS/MSを用いた畜産物中のキンクロラックの分析法—  
○竹脇優太郎、岡部 亮、青柳光敏（食品安全G）
9. 【受託試験研究】厚生労働省  
食品に残留する農薬等の成分である物質の試験法開発—LC-MS/MSを用いたオキシロニック酸分析法（農産物）の検討—  
○宮島祥太、平間祐志、岡部 亮、竹脇優太郎、青柳光敏（食品安全G）

10. 【一般試験研究】ワンヘルス・アプローチという視点に立った、薬剤耐性菌と下痢症起因菌に関する疫学及び検査法に関する研究－3年間の成果報告－  
○小川恵子、三津橋和也、森本 洋（細菌G）
11. 【一般試験研究】ワンヘルス・アプローチという視点に立った、薬剤耐性菌と下痢症起因菌に関する疫学及び検査法に関する研究－2018～2020年の北海道におけるEHECのMLVA解析について－  
○三津橋和也、小川恵子、森本 洋（細菌G）
12. 【一般試験研究】カンピロバクターを迅速かつ簡便に型別する新たな遺伝子検査法の研究  
○大野祐太、池田徹也（細菌G）
13. 【外部資金活用研究】厚生労働行政推進調査事業費補助金（新興・再興感染症及び予防接種政策推進研究事業）  
愛玩動物由来感染症のリスク評価及び対策に資する発生状況・病原体及び宿主動物に関する研究－エキノコックス（多包条虫）流行におけるイヌ対策について－  
○八木欣平、孝口裕一（医動物G）、入江隆夫（宮崎大学）、山田恭嗣（やまだどうぶつ病院）、森嶋康之（国立感染症研究所）

## 7. 受賞

### 地方衛生研究所全国協議会関係

令和2年度地方衛生研究所全国協議会会長表彰（令和2年9月4日決定）  
生活科学部生活衛生グループ 主査（水衛生） 高野 敬志

受賞者は、平成2年5月、北海道立衛生研究所に入所、生活科学部水質衛生科に配属され、水道水や地下水等の理化学試験及び微生物試験に従事するとともに、湖沼における藻類生態の研究にも取り組み、水の華や淡水赤潮の発生メカニズムの解明など、多くの成果を上げた。特にケイ藻やラン藻類の栄養塩摂取の競合等については貴重な知見を発表した。これらの成果をもとに平成18年に山形大学大学院理工学研究科より博士（理学）を授与されている。平成15年には感染症センター生物科学部に異動し、寄生虫の鑑定業務に従事し、エキノコックス、ジアルジア、住肉孢子虫等の遺伝子鑑定を行う中で、寄生虫遺伝子型に関する新たな知見を見いだした。さらに動物への感染事例の報告を行うなど、寄生虫症対策に貢献した。平成23年からは理化学部生活保健グループに異動し、温泉や水道水、地下水などに関する試験・調査研究に従事した。中でも全道で湧出する温泉の特異性を明らかにする調査研究―腐植物質に関する元素化学的研究では、北海道遺産とされるモール泉の特徴を科学的に明らかにすることにより、その価値を高めることに大きく貢献した。

また、民間の分析機関や水道水質試験室を対象として、化学分析や生物検査の研修を行うなど、技術者育成にも貢献している。

今回の受賞は、これらの功績が評価されたものである。

令和2年度地方衛生研究所全国協議会北海道・東北・新潟支部支部長表彰（令和2年7月9日決定）  
感染症部細菌グループ 主幹 森本 洋

受賞者は、平成5年4月北海道立衛生研究所に採用され、一貫して食水系細菌感染症の検査、調査、研究に従事し多くの成果を上げてきた。中でも、採用当初から、全国的に多発していたサルモネラ、腸炎ビブリオ、腸管出血性大腸菌等への対応及びレジオネラ症への対応については、全国の研究者と連携し、様々な公衆衛生的な対策に取り組んできた。特に後者においては、平成10年度より本格的な調査研究に着手し、平成18年度からは、いわゆるレジオネラ研究班として厚生労働科学研究の研究分担者として、全国規模での検査精度の安定に向け取り組んでいる。最近では、公衆浴場の衛生等管理要領等改正のワーキンググループとして、「公衆浴場における衛生等管理要領等の改正について（令和元年9月19日 厚生労働省大臣官房生活衛生・食品安全審議官通知）」の発出に貢献、執筆代表となった検査法が、「公衆浴場における浴槽水等のレジオネラ属菌検査方法について（令和元年9月19日 厚生労働省医薬・生活衛生局生活衛生課長通知）」として国内標準法となった。本法では、発表論文「分離集落の特徴を利用したレジオネラ属菌分別法の有用性」も採用された。

また、構築した外部精度管理事業が、官・民間問わず全国の検査機関で採用され、さらに国立保健医療科学院主催の新興再興感染症技術研修ほか、厚労省や学会からの招請講演を含め、全国規模での様々な研修等の講師として検査法の普及や衛生対策に貢献してきた。

今回の受賞は、これらの功績が評価されたものである。